

話題 49 沖縄・生と死と老いをみつめる会（1）

世話人 石川清司

1995年7月23日（日曜日）、那覇バスターミナル向かいの自治会館において、ラサール神父を代表とする「事前指定書と遺言状作成を考える実行委員会」主催による「治療事前指定書」と「遺言状」の作成を考えると題したシンポジウムが企画されました。講師は私と弁護士永吉盛元氏、浦添総合病院の宮城敏夫院長でした。宮城院長は当時、病院の方針としてLet Me Decide「自分で決める自分の医療」の運動を展開していました。反響は大きなものがありました。

その後、ラサール神父の思いと重なり、勢い「生と死を考える会」の結成へと突き進んでいったのです。当時、上智大学のアルフォンス・デーケン先生の指導のもとに、全国各地に「生と死を考える会」の地方組織がつくられていました。この会の主たる目的は、「死」をタブー視することなく、あえて「死」を直視することにより、今を如何に生きるかを考えることにありました。

1996年5月25日（土曜日）、午後2時、カトリック安里教会における「沖縄・生と死と老いをみつめる会」の発足式・総会の場面から、その足跡をたどることにより、ラサール神父の情熱とその思い出について語ってみたいと思います。

総会では、「生と死を考える会」全国協議会会長のアルフォンス・デーケン先生からのお祝いのメッセージも届けられました。初代理事は、五十音順で石川清司、下地武子、多和田真順（故）、仲大底利子、仲宗根和則、比嘉高哲（故）、山城正常、ラサール・パーソンズとなっていました。

1996年2月、私は「ローカルな死生学各論」という小著を出版していたため、その出版祝賀会も兼ねての発足式でした。拙著を読み返してみると、「ローカルな死生学」における私の悩みは、外科医としての悩みそのものでした。患者さんとその家族に正確に病名を告げることのできなかつた当時の社会の風潮に起因したものでした。経済優先の合理主義社会は、人間の「死」を敗北と受け止める雰囲気になっていました。

総会の趣旨も、沖縄における「生と死と老い」の問題をタブー視するのではなく、より積極的に取り組むことにより、「死生学」や「死への準備教育」を広く普及し、「やさしさと思いやりの心の輪」を広げることにあつたのです。

ラサール神父と私の暗黙の了解として、根本には「死」を直視することは、「宗教」「信仰」の問題を避けて通ることはできないとする大前提があつたものと思われまふ。ラザロ会の設立後、定期的に学習会が開催されました。

1996年7月26日（金曜日）のテーマは、「道ゆきて・ある僧侶の1年」と題したビデオの鑑賞の後に、安楽死の問題についての討論が行われました。

1997年5月31日（土曜日）。発足から1年。那覇市内の八汐荘を会場に、安谷屋喜子さん（故）の司会で創立1周年の記念講演と総会が行われました。

1997年9月27日（土曜日）。JA会館 那覇農協会館において、「脳死がわれわれに問いかけるもの」と題してシンポジウムが開催されました。仲宗根和則先生の司会で、興禅寺崎山崇源老師、琉球大学法文学部の田中朋弘先生、那覇第一法律事務所の永吉盛元氏、琉球大学法文学部浜崎盛健先生、琉球大学医学部脳神経外科助教授の宮城航一先生が演壇に立たれました。臓器移植の問題と関連して、“脳死は人の死か？”という問いが投げかけられていた世相でした。

1998年2月14日（土曜日）、宜野湾市民会館大ホールにおいて1200人の聴衆を集め講演会が開かれました。講師はベストセラーとなった「病院で死ぬということ」の著者、東京・桜町病院ホスピス科長の山崎章郎先生と上智大学のアルフォンス・デーケン先生でした。

講演に先立って、筋ジスと闘いながら音楽活動を続けていた国立療養所沖縄病院の「ニース」のオリジナル曲の演奏があり、聴衆に感銘を与えました。準備されたニースのオリジナル・アルバム「SOME DAY」の完売に、西平直樹、謝花勇光、謝花勇武のニースの三人組の歓声が耳に残っています。

翌日、デーケン先生は北部地区医師会看護学校の講堂においても講演をされました。

1999年2月27日（土曜日）。沖縄コンベンションセンター劇場棟を会場に、作家の山本七平氏夫人、山本書店店主山本れい子さんの講演「七平ガンとかく闘えり」が行われました。

1999年6月26日（土曜日）、那覇女性センター、とまりん5Fの学習室において第4回の総会と講演会が開催されました。介護保険法の実施に先立って、その認識を深めるために、琉球大学医学部保健学科地域看護学教室の小笹美子先生による「介護保険法を考える」というテーマでの解説があり、討論が行われました。

2000年の時点での理事会は、ラサール代表、石川清司事務局長、仲宗根和則補佐、永吉盛元補佐、稲国安尚、大江八重（故）、志良堂仁、多和田真順（故）、仲里幸子、保良昌徳の各理事より構成されました。「語り合いの会」を中心に活動が展開されていました。

2001年5月19日（土曜日）、第6回の総会が開かれ、その基調講演として興禅寺の崎山崇源老師の「生きる心」と題して、ラサール神父との出会い、絶対的自己をみつめる心、深い呼吸、祈りと瞑想等について、分かりやすく、和やかな雰囲気での講話が行われました。（講演の内容については、本書の思い出の記録に全文掲載）。

2002年3月16日（土曜日）。那覇市内、沖縄青年会館において「ニースの音楽と比嘉信子さんの心の世界」と題しての演奏と講演会がもたれました。その感想を綴った沖縄タイムスの次のような記事があります。

“病気、障害があるから不幸ではない。健康な人でも不幸な人がいる。結局、幸せか否かは自分で決めることなんです。先日、那覇市内で催された福祉コーディネーター比嘉信子さんと筋ジストロフィー患者の三人組、ニースの演奏会と講演会。その四人の座談会は、障害とは何かをあらためて考えさせると同時に、逆に健常者にこそ必要な精神面のバリアフリーを痛感させられるものだった”。

2002年5月25日（土曜日）、第7回の総会において、弁護士永吉盛元氏の「安楽死」について考えるというテーマでの基調講演が行われました。時は、川崎市の病院における筋弛緩剤による安楽死の問題

がマスコミを賑わせていたその時でした。「安楽死」か「慈悲の殺人」かで議論がなされました。

2003年7月5日（土曜日）。カトリック小祿教会のホールにおいて第8回の総会がもたれ、総会の後でギタリスト、ペトロ・ショウーゲン大城氏のギターリサイタルが行われた。大城松健さんは、5年前に直腸がんを患い、手術を受け療養生活を経た上での音楽活動への復帰の意欲をみせ、聴衆に感動を与えました。現在も精力的に活躍中です。

2003年11月18日（火曜日）、小祿カトリック教会を会場に、「人生のリフォームをしてみませんか？」と題しての勉強会が4回シリーズで組まれました。そのスタートは、県立精和病院院長の中山 勲先生の「第3の人生」でした。中山先生は、講演の最後を「よく生きるとは、生き生きと老い、病んでくじけず、安らかな死を待つこと」とする日野原重明先生の言葉で結ばれました。

第2回は「愛をさがそう」：ラサール神父（本書に全文掲載）、第3回は「中年以降の健康管理」：石川清司、第4回は「自然に帰ろう」：仲宗根和則先生が担当しました。

2004年6月11日（金曜日）、パレット市民劇場において第9回の総会が開かれました。

当時、筋ジスと闘う音楽グループ「ニース」の面々は、セカンドアルバム「ことば」をリリースしていました。その記念コンサートとして“NIY-S（ニース）の音楽と「ことば」の世界”というタイトルで演奏会がもたれました。キーボードの西平君の筋力はかなり落ちていて、一抹の不安を覚えたのは誰もの感想でした。しかし、彼はユーモラスに語りを加え、演奏を成し遂げたのです。公の会場での彼の最後の演奏となりました。

2005年6月11日（土曜日）。第10回の総会と講演会が開催されました。基調講演は、弁護士の永吉盛元氏が担当され、「初めて学ぶ憲法～生と死の観点から～」というテーマで行われました。

2005年8月12日に理事会がもたれ、地道な活動を続けてきた「語り合いの会」の休会が決定しました。諸般の事情によるものです。そして、新たに「命」をテーマにした学習会の開催が企画されることになりました。

2005年10月14日（金曜日）、県女性総合センター「ていりる」で講演会が開かれた。永吉盛元氏の「生と死と老いについて」というテーマでの講演会が開催されました。憲法にうたわれた「個人の尊厳」の基本的な問題とユーモラスに語られた「・・・とんでもない遺言」「死はカラスが教えるもの」等のユーモラスな解説の中に、死を回避することばかり考え、受け入れることを忘れた現代人への警鐘を鳴らした講演でした。崎山老師のコメントあがり、会場をうめつくした聴衆に、なごやかさの中にも基本的な命題を突きつけた講演会でした。

2005年、冬。「沖縄・生と死と老いをみつめる会」が諸般の事情により冬眠に入ります。